

第 1 章

令和6年度 岡山県小学校長会 総会・研修会の概要



開会式

令和6年度 岡山県小学校長会総会・研修会の概要

令和6年度岡山県小学校長会総会・研修会を5月14日（火）10時から、ピュアリティまきびにおいて、昨年度に引き続きハイブリッドオンライン形式で開催した。議事の採決については、小学校長会ホームページを活用して、事前にWEB上で回答をとり、承認された。

全体進行 幹事長 小山 典子

◆ 総会・研修会の日程

- 1 開会のことば
- 2 国歌演奏
- 3 役員紹介
- 4 会長挨拶 会長 小川 泰永
- 5 感謝状並びに記念品贈呈
 - 前 会 長 高尾 敏也 様
 - 前 副 会 長 渡部 健治 様
 - 前支部長代表 平井 秀尚 様
 - 退職者代表 岩藤 一成 様
- 6 謝 辞 前会長 高尾 敏也 様
- 7 閉式のことば
- 8 令和5年度事業報告（担当幹事）
- 9 議 事
 - (1) 第1号議案
令和5年度 決算報告について
 - (2) 第2号議案
規約の改正について
 - (3) 第3号議案
令和6年度 活動方針について
 - (4) 第4号議案
令和6年度 事業計画について
 - (5) 第5号議案
令和6年度 歳入・歳出予算案について
- 10 研 修
 - 講師紹介 副会長 藤原 陽子
 - 演題「人生100年時代～昭和に置き忘れて来たもの?～」
 - 講師 元山陽放送アナウンサー
 倉敷芸術科学大学客員教授
 濱家 輝雄 氏

謝 辞 副会長 金盛 大祐
11 閉会挨拶 副会長 畝本 昭則

会長挨拶



小川会長

謝 辞



高尾前会長

監査報告



松本監査

講師紹介



藤原副会長

研修謝辞



金盛副会長

閉会挨拶



畝本副会長

全体進行



小山幹事長



開会の挨拶

岡山県小学校長会 会長 小川 泰 永

県内の校長先生方、おはようございます。今年度、岡山県小学校長会の会長を拝命いたしました岡山市立福田小学校の小川です。開会にあたりまして一言ご挨拶を申し上げます。

私たちの目の前には、解決したい、何とかしたい課題が山積しています。講師不足・若手教員の育成・働き方改革・GIGAスクールの推進・そして、細かいところと言いますと、自転車教室への対応といった行事精選の問題もあります。

私は、こういった課題を解決するために、県内の校長先生方としっかり「対話」をし、その困り感について、互いに「共感」し、一緒に悩み、一緒に考え、次の世代を担うこれからの校長先生方のために、少しでも改善された県小学校長会にしていけたらと思っています。

昨年度の県の校長会のキャッチフレーズは、コロナ明けということもあり、高尾前会長は「次の一歩」とされました。今回校長会のHPを刷新し、総会の議事承認をWEB上で行うことができましたが、昨年度高尾前会長が進められました「次の一歩」の象徴と思っています。

その流れを引き継ぎ、私は「次の世代のために」何ができるのかを皆さんと一緒に考えていきたいと思いましたので、キャッチフレーズを「対話と共感」としたいと思います。

今回の総会にあたりまして、県内の校長先生方から貴重なご意見をWEB上でいただ

きました。これも一つの対話と捉えておりますが、そういった県内の校長先生方の思いやアイデアを我々もしっかり受け止め、参考にし、これからの県小学校長会の運営に活かしていきたいと思っております。

県小学校長会の話とは少し異なりますが、私の前任校の教頭先生に、以前「どうして教頭試験を受けたのか」と聞いたことがあります。教頭先生の答えは、「以前勤めた時の管理職の方がとても素晴らしく、あんな管理職ならやってみてもいいと思った」とのことでした。どの校長先生方にも理想の校長像があるように、現在の教頭先生にもあり、皆さんを見て、更に管理職へのやりがいや思いを高めてもらいたいと願っているところです。



各学校におかれましても「対話と共感」を意識していただき、これから校長となる教頭先生、あるいは管理職を目指す教務主任や学年主任等の先生方が、各校の校長先生の思いを把握し、それぞれが笑顔で元気に業務にあたることができるように学校経営を進めてい

ただきたく思っております。

最後になりますが、今年度、校長会関連の研究大会の準備を進めていただいております三支部等の校長先生方に、一言感謝の気持ちを伝えさせていただきます。

まず、11月22日開催の県大会津山大会の準備をしていただいております津山支部を中心とした津山ブロックの校長先生方、久しぶりの支部会場地での開催となります。着実に準備を進めていただきありがとうございます。

次に、令和7年度倉敷で開催されます中国大会の準備を進めていただいております倉敷支部の校長先生方、2年がかりの準備となりますが、早々に昨年度から動き出していただいておりますことに感謝申し上げます。ありがとうございます。

最後に、岡山支部の先生方、11月6日・7日に開催されます、指定都市の全国大会の本番、是非、全国の校長先生方が岡山市にきてよかったと思える研究協議会にしていればと思いますし、県小学校長会も全力で応援したいと思っております。

少し、長くなりましたが、開会のご挨拶とさせていただきます。本日は、よろしくお願いいたします。





謝 辞

岡山県小学校長会 前会長 高尾 敏也

先生方、おはようございます。

令和5年度末をもって退会いたしました60名を代表し、お礼のご挨拶を申し上げます。

本日は、令和6年度の岡山県小学校長会総会が開催されますことを心よりお喜び申し上げます。そして、ただ今は、退会した私たちに小川会長様から身に余る感謝状をいただき、誠にありがとうございました。

手前味噌ではありますが、私たちは子どもたちの健やかな成長を願い、小学校教育の充実と推進を目指して、日々努力してまいりました。けれども、おそらく順風満帆な教職人生だった者は誰一人おらず、悪戦苦闘の毎日を積み重ねてきた者ばかりだと思っています。

そうした私たちが、胸を張って退会の日を無事に迎えることができたのは、数えきれない、実に多くの方々からいただいた温かいご指導とご鞭撻のお陰だと、この場をお借りして感謝申し上げます。

退会を迎えた私たちの教職人生、特に校長として勤めた数年は、新型コロナウイルス感染症を抜きにしては語れません。コロナ禍にあっては、これまで誰一人として経験したことのない状況の中で、何をどうするのか、誰がするのか、いつまでに行えばいいのかなど、校長にはその都度、適切な舵取りと決断が求められました。けれども、新型コロナは必ずしも「負の遺産」ばかりを残したのではなく、「働き方改革」の波とも相まって、本来の子どもたちの育ちや学校のあるべき姿を再確認・整理する「よい機会」になったとも言えると思っています。

このような未曾有の状況にあっても、前に進むことができたのは、何より「県小学校長会」という大きな組織の下で、一人一人の校長がリーダーシップを発揮してきたからに他なりません。そして、その支えとなったのはこの校長会の「ネットワーク」ではなかったかと思っています。

今年度新たに県小学校長会の会員となられた校長先生方と力を合わせ、これからも学校経営の責任者としての自覚と強い連帯感をもって、いかなる困難に対しても臨機応変に立ち向かう、「次の一步」を刻む県小学校長会であってほしいと思います。そして、「定年延長一期生」である私たち今年度の退会者は、これからもずっとエールを送り続けたいと思っています。

終わりにになりましたが、皆様の今後のご活躍と、県小学校長会の益々の飛躍を祈念いたしまして、お礼のご挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。



令和6年度 岡山県小学校長会活動方針

岡山県小学校長会は、結成以来、本県の小学校教育の充実・発展のため、真摯に研究と実践を重ねるとともに、より良い教育諸条件の整備を求めて、多大な成果をあげてきた。

現在、社会では、グローバル化や情報化が進み、少子高齢社会・人口減少社会を迎え、労働構造も大きく変わろうとしている。そして、今後は、デジタルトランスフォーメーションによる社会構造の変化や多極化などがこれまで以上に進行することが予想される。目まぐるしく変化していくこれからの社会の中で主体性をもって生きていくためには、予測困難な状況に対応する力を付けていくという発想から、変化の中で自ら新たな価値を創り出す力を付けていくという発想への転換が必要である。さらに、コロナ禍で学んだことの一つである、答えを見出しにくい問いに立ち向かい、多様な立場の者と協働しながら最適解や納得解を生み出す力は、今後一層強く求められていくであろう。

こうした中において学校には、子どもたちの学びの保障と多様な幸せと共に、社会全体の幸せでもあるウェルビーイングの実現のために、一人一人の可能性を最大限に引き出す教育を推進することが求められる。また、SDGsに代表される持続可能な社会の創造者の育成のため、「知識及び技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」「学びに向かう力や人間性等の涵養」といった学力の三つの柱をバランスよく育む教育を実現していかなければならない。

そのため校長には、判断力と決断力をもって、学校組織の活性化を図り、創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善に努めるとともに、校長として明確なビジョンを掲げ、「学校を元気にする」ことが求められている。

また、学校における働き方改革の実現に努めるとともに、教員が子どもと向き合う時間の確保質の高い教育活動を実現するための教職員定数の改善や人的措置の充実、教職員の人材確保と資質・能力の向上、「GIGAスクール構想」の推進、いじめ・不登校への対応、特別支援教育の充実など、山積する教育課題の解決に立ち向かっていかねばならない。さらに、全ての子どもたちの可能性を引き出す個別最適な学びと協働的な学びを実現させる「令和の日本型学校教育」の構築に向け、先見性をもち、未来を見通した課題の明確化と解決に努める必要がある。

このような状況に対し、組織の総力をあげて調査・研究活動の充実に努めるとともに、積極的に施策提言を進め、県民の信託に応える必要がある。そのために、校長は自らの使命を自覚し、学び続け、子どもたちと学校の未来を見据えた確かな計画と実行力をもって「チームとしての学校づくり」を推進し、信頼される学校づくりに努める必要がある。

そこで、本会は、全国連合小学校長会並びに岡山県中学校長会、岡山県教育委員会等と密接な連携を保ち、各支部小学校長会との連携を緊密にして組織及び活動の充実に努め、次の事項を重点としてその実現を期するものである。

1 学校経営の充実

校長自ら研鑽に励み、学び続けることによって、学校経営上の課題を明確にし、その解決を図るための確固たる経営方針の下、創意ある教育活動の実現により、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという学習指導要領の理念の実現を図るとともに、家庭・地域社会から信頼される学校経営の充実に努める。

2 研究活動の充実

全国連合小学校長会の研究主題「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を受け、「夢や知を育み、ともに未来を拓く子どもの育成に向けた学校経営の推進」を副主題として研究を進め、その成果を学校経営で具現化するよう努める。

3 創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善

豊かな創造性を備え持続可能な社会の創り手を育成するため、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実によって知識及び技能の習得を図るとともに、思考力、判断力、表現力等の育成や学びに向かう力、人間性等を涵養するための教育課程の編成・実施・評価・改善を着実に進める。

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善、言語活動の充実、情報活用能力の育成、1人1台端末の活用、多様な他者との協働、自主的・自発的な学習の促進、学校内外のリソースの活用等により、カリキュラムマネジメントの充実に努める。また、道徳教育の改善・充実により、心の教育を一層推進するとともに、いじめや不登校等への適切な対応を図ることや健やかな心身の育成に努める。さらに、特別支援教育においては、個のニーズに応じた支援を充実させ、一人一人の自己実現を目指す教育を推進する。

4 教職員の定数や処遇の改善・学校における働き方改革の実現

教科担任制の適切な運用による持ち授業時数の縮減など「子どもと向き合う時間」の確保、質の高い教高学年教科担任制の適切な運用による持ち授業時数の縮減など「子どもと向き合う時間」の確保、質の高い教育活動を実現し「チームとしての学校づくり」を推進するための人的措置の充実、学校業務の整理や学校徴収金公会計化等による教員の長時間勤務の改善、義務教育費国庫負担制度及び「義務教育諸学校の教育職員の確保に関する特別措置法」の堅持等について、国や県の動向を注視しながら提案・陳情活動を行い、教職員の定数や処遇の改善・学校における働き方改革の実現に努める。

5 教職員の資質能力の向上

質の高い教育活動を実現するための人材育成を目指し、明確な人材育成方針のもとに適切な指導助言を行い、研修体制等の充実を図ることにより、教職員一人一人に専門職としての自信と誇りを育み、学級経営、教科指導、生徒指導などの実践的指導力を高めるよう努める。

また、教職員の資質能力の向上に関わる諸制度、教員の養成・採用・研修体系の整備等の提案・陳情活動に努める。

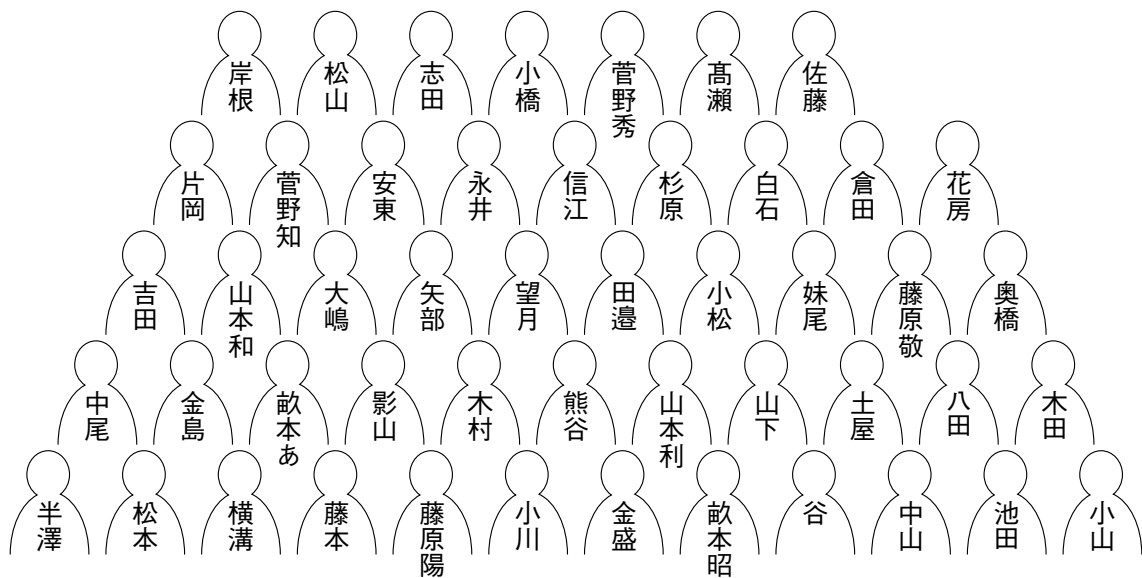
6 組織の強化・活動の充実

令和6年度岡山県小学校長会教育研究大会津山大会やブロック別協議会、各ブロックや支部の校長会等の主体的な取組と情報の収集・整理・分析、発信を通して、組織の強化と活動の充実に努める。

また、県中学校長会との連携を一層深め、提案・陳情活動の充実に努める。

令和6年度 岡山県小学校長会役員

(令和6年4月23日(火) 於 ピュアリティまきび)



講演要旨

「人生100年時代～昭和に置き忘れて来たもの?～」



講師

元山陽放送アナウンサー
倉敷芸術科学大学客員教授

濱家輝雄氏

※講演内容を一部抜粋し、まとめています。

- 50数年岡山に暮らしているので、横浜弁よりももう岡山弁のほうが多くなっている。ラジオの放送も今やっているが、もうほとんど岡山弁でしゃべっている。長年暮らしている中で、岡山という文化、昔あった貴重な歴史プラス文化、そういった生活感のあるものが今の時代どんどん消えていっているように感じている。
- 講演会のテーマである人生100年時代。今は、遠くなった昭和という時代。戦前と戦後では価値観が180度変わった。豊かさに対する価値観が変わっていった。本当の豊かさというのは何なのか。
- 孤独死とか孤立死がおこっている現状。今年の1月から3月でひとり暮らしの方が自宅で亡くなった数が21,716人。これをニュースの数字として片づけるわけにはいかない時代になっているのではないか。隣近所のつながりが戦後の昭和の時代には確実にあった。その時代を取り戻さなくてはならないと思う。時代の流れの中で、時代に任せて、価値観がどんどんどんどん変わっていくが、時代が流れているからという理由で片づけることができることではない。
- 人が何かをしゃべった時にはリアクションが必要。会話では、余計なことを言い過ぎるといけないが、お互いが顔を見て、キャッチボールをして、そして笑顔でいれば、お互いの信頼関係が生まれてくる。コミュニケーションの一つとして、顔を動かした八の字コミュニケーションが重要である。八の字に視線を動かすと、学校では、児童も校長先生が自分に向かって話をしていると認識することができる。表情や視線の向け方が子どもが多くいる場ではとても必要。
- 人生100年は無理だというのが、自分自身がいろいろな病気を経験するなかで、数字というのは、自分のいい刺激になることは事実。今、日本で100歳以上の方は93,000人ほどいる。少子・高齢化で、高齢者が伸びている。医療体制が整っているなかで、生かされているというよりも、自分が一体どう生きるのかという時代を迎えている。
- 山陽放送で定年退職を迎え、何か違うことをしたいなということで、タイミングよく大学に勤務することになった。会社を離れ、居場所というものを考えた。会社は結



局「係」だった。会社にいるときは、「このラジオの方向性として、月火水木金の番組編成はこういうふうにしたほうがよい」といってれば、各方面から連絡がたくさん入ってきた。しかし、定年退職を迎えた途端に、全くなくなった。業務としてのつながりというのは、ビジネスとしては必要だが、人としてのつながりをきちんと持っていたのだろうか考えるようになった。これまでの経験で、人と人としてのつながりをずっと感じながら関係性を持ち続けた人たちとは、今でも顔を合わせたり、食事をしたりしながら関係を継続している。このような関わり方が大切なのではないかと考える。

- 人のつながりというのは「絆」という言葉で表現される。家族の絆とかと同じように、岡山で生きて暮らし、そしてやがて人生を終える時が来るが、そのときにこういう人たちと会ってよかったと思えることが「絆」ではないかと思う。
- 東日本大震災があった年の世相を表す言葉として、清水寺で書かれた文字は「絆」。絆とは何だろうか。言葉で表現すると、人と人とのつながりが絆ということになるが、言葉として「絆」を知っていてもそうではいけない。「絆」の自分なりの解釈が

ある。人が二人いて、互いに絆という文字を持っていると考える。絆という文字は糸の半分というニュアンス。半分と半分の糸が互いに結び合って初めて絆という文字を解釈することができるし、形になる。本当の解釈ではないが、糸の半分をみんな持っており、その人と人が握手をすることが「絆」という文字ができるのではなく、一歩前に出て、人ときちんと握手をするぐらいのつながりを持ちなさいという教えが「絆」という文字にあるのではないかと思っている。

- 昔は、子どもたちに配布するものは、印刷やメールではなく、手で書いていた。それには、教えがあり、学びがある。印刷して配付するものよりも、手で書いてきちんと配ることで、先生の気持ちが生徒に伝わったり、その子にとって宝物となって取っていたりするのではないか。こういうことが人と人、あるいは世代を超えたつながりになっていくのではないかと思う。
- 「あの頃の日本人に笑顔で負けるな。」という言葉からいろいろなことを考えるようになった。あの頃とは昭和の高度経済成長の入り口の昭和30年代か、戦後間もない頃。戦争に負け、一流国、先進国に向けて立ち上がって頑張ろうじゃないかという日本人の心意気がある時代に、GHQなどいろいろな人たちがカメラを持って全国を回っている。そのときに、共通して日本人を撮ったときにあったものが「笑顔」である。戦争に負けて、着るものも食べるものもない時代。親を亡くしてしまった子どもたちがたくさんいた時代。たばこを拾ったり、ガード下で靴を磨いたりしている子どもたちに

も笑顔があった。その笑顔が今あるだろうか。作り笑顔ではない。お互いがお互いに向けての関係、人と人とのつながり、隣近所、向こう三軒両隣といった結びつきがきちんとあった時代であった。「見る夢の大きさと負けるな。」という言葉でも考えさせられる。自分たちの子どもの頃は、すごい夢を持っていた。できそうにないことも、それに向けて頑張るといふ意気込みがあった。「暮らしの豊かさだけでなく、心の豊かさでも負けるな。」という言葉はどう感じるか。

- 「あの頃の日本人に笑顔で負けるな。見る夢の大きさと負けるな。暮らしの豊かさだけでなく、心の豊かさでも負けるな。」という言葉の力というのが、何かすごいと思う。その言葉の一つ一つが胸に刺さったり、そこからの学びがあったりする。人と会えば必ず学びの一つや二つある。人と人が向き合えば、いいことばかりの学びではないが学びはある。
- 長嶋茂雄さん対談したことがあり、教えがたくさんあった。昭和の貧しさと、昭和の高度経済成長の発展を長嶋さんの中から教えてもらった。長嶋さんは何でも横文字にする。それが、長嶋さんの豊かさであり私たちをすごく力づけてくるものになっている。
- 子どものときに何かを体験、経験して、これだというものに出会うはず。いろいろなところに出かけると、将来の自分につながるきっかけがよく見えることがある。数々の人と会って、必ず向かい合って話をしたときに学びがあると思う。プラスマイナスいずれの学びもある。人と会わないと分

からないこともたくさんある。

- 長嶋さんが5条の徳「仁・義・礼・智・信」のなかで、大切にしているのは義。裏切らないということ。期待されたシーンで期待通りのプレイをすることが長嶋さんの義のいわれ。
- 気持ちの中にきちんと刻み込んだものがあると生き方や考え方がぶれない。自分の人生は、自分でどうやって生き抜いていくのか。どういう生きざまこそが自分らしいのか。それこそが人生ではないかなと考える。昭和に忘れてきたものは、そういう心意気とか志とか、人と話をして学んでいくとかいったもの。
- 昭和33年の長嶋さんがデビューした年は、豊かさに向かったの本当の一步だった。前に向かって一歩ずつ、一歩ずつ、みんながつながって歩いていた時代である。今は、個人主義が徹底し過ぎていて、何か一人でやっていく時代になってきている。孤独を抱えている子どもたちがいることに気が付かなければならない。いずれ私たちの世代は独りぼっちになっていくが、生きていくとき、そして生活しているときに、暮らしているときに孤独の孤になっている人に手を差し伸べるといふことも我々にはできるはず。どうしても学校になじめない子どもたちに手を差し伸べるのが私たち大人の役割。顔を合わせて話をする。そして、当たり前だと思っていることに感謝をすることを教えるのも我々大人の役割。
- 個人の考え方ではあるが自分の懐のために政治をしている人たちが結構目立ってきた。何とかしないといけない。日本とか県・市のレベルで。県と市が仲良くしなくては

いけない。被害者は市民であり県民なのだから。

○日本の中心は岡山だという意識を持つことが大切。全てが東京に集約されているような感じになっているが、私たちが生まれて暮らして、生きている町こそが日本列島のど真ん中である。その町に自信と誇りを持って、一步一步歩いていって、積み重ねて、他に負けないような岡山をつくっていくのが我々の仕事を含めたいわゆる生き方の一つだと思う。

○ふるさとの言葉を大切にしていきたい。

○憲法9条などについても注視していく必要がある。政治に任せるだけではない。私は



こう思うというものを持つ必要があると思う。大勢の中に埋もれてしまうのは簡単だが、日本の先行きを考えると、自分の考えを持たなくてはならない。今は、表現の自由が21条で保障されており物を言える時代である。感じたことを言葉にできる、そういう環境というのはとても大事だと思う。振り返って今のテレビとかいうものをちょっと眺めてみれば、何か制限というよりも、伝えるということが足りないように思う。

○コミュニケーションにはメラビアンの法則があると言われる。メラビアンというカリフォルニア大学の先生が、言葉というもの

が一体どのぐらいの力があるのかを研究した。アメリカの研究であって日本にそのまま当てはめることはできないが。コミュニケーションが成り立つ中で、言葉の力、内容、表情がそれぞれ何%を占めているかということを示したもの。言葉は7%。内容が38%、表情が55%。つまり、表情というものが私たちの考えていることや伝えたいことを相当な力を持って伝えていることになる。私たちが生活の中で表情をきちんと持つこと、表情を豊かにすることが大切。

○これまでたくさんの人に会ってきた。そして、いろいろな言葉を気持ちの中に刻んでいる。北の方のおうちでおばちゃんとお出会った。出会ったのがもう35年ぐらい前だが、おばちゃんが言った言葉が今でも自分の気持ちの中に残っている。その言葉とは「初春に独りぼっちの箸を置く」という言葉。その方は、大きなかやぶき屋根のおうちに一人で住んでおられた。いろいろなお話を聞いた。正月、大きなお屋敷で、お節をいただくのに、一人だけの箸をぼんと置く。これが人生を物語っているような気がしてならなかった。いつか私たちは独りぼっちになる。豊かな人生を送るにはどうしたらいいのか。それを考えるきっかけを下さったのがこの五七五の言葉であった。自分には友達がたくさんいるが、いつかお節料理を食べるときに、箸の音がぼんと何か聞こえてくるような時が来るのかと考えたとき、スタッフと一緒に帰るに帰れないような時間を送ったのを覚えている。

○時代が変わったが、昭和に置き忘れたことというのは、人によって様々であり、皆さんの中で考えてもらいたいと思う。